

「……なぜ夜の間かと言いますと、これは死者がとりわけお日様を恐れるからです。したがって、彼らが石を積み上げるのは決まって日が暮れてからだという伝承で……」

(つて、まだ続いてるし……っ)

「おや？」

永遠のように続くと思われた怪談トークは、意外とあっさり終わりを告げた。

「……小泉。なんだその女は」

眼鏡の彼の言葉を遮るかわさげようにして、また別の人物が現れたからだ。

——その男性の第一印象といえは、『怖い』の一言に尽きる。見上げるほど上背のある体たいくに、伶俐な瞳。深緑色のかつちりとした警官のような制服を着込み、腰にはサーベルを携えている。目と目が一瞬合っただけで薄ら寒いものが背筋を走るほどに、『おっかない人オーラ』が全開だった。

「これはこれは、警視庁妖邏課ようらかの藤田五郎警部補ではありませんか。今夜も見回りご苦労様です」

「余計な挨拶はいい。その女は誰だ。答えろ」

「誰って、それは……」

彼は眼鏡のフレームを再び持ち上げてから、まじまじと私を見つめた。

「ええと……どちら様でしたでしょうか。娘サン？」

「わ、私は、その」

なんて答えたらいいいんだらう。藤田さんという人の射すくめるようなまなざしが怖くて、うまく声が出ない。

「……なんと奇天烈な洋装だ。とても井上外務卿が招いた賓客ひんきゃくとは思えん。おい娘、名前を言え。」

どこの門閥もんぼつの者だ」

彼は1歩、私へと距離を詰める。

(これって、すごくピンチなんじゃ……)

もしこっそり潜り込んだとバレたら、私はどうなってしまっただろう。

(まさか、そのサーベルで……!?)

——かちやつ。

「っ！」

彼は私の悪い期待に応えるかのように、サーベルの柄の部分握ってみせた。

「藤田さん、こんなにか弱い娘サンになにを？」

「なぜ答えない、娘。場合によっては官吏抗拒かんりこうきよの罪に問うぞ」

(そ、そんなこと言われたって)

このままだと逮捕されてしまうかもしれない。やがて着飾った婦人や紳士たちが、遠巻きに私たちの様子を見物し始める。

私は、どうしたらいいんだろう——？